

○委員長（岸宏一君） 次に、松沢成文君の質疑を行います。松沢成文君。

○松沢成文君 次世代の党の松沢成文でございます。

今日、私は、国民の皆さんの大きな関心事になっていきます国立競技場の建設問題について総理の見解をただしていきたいと思います。国民の皆さんにも分かりやすいように、今回の新国立競技場建設における大失態ということで、分かりやすくパネルを作らせていただきました。（資料提示）

初めに、建設費用の積算の甘さ、あるいは建設会社、設計会社との交渉力が全くないということで、この費用が乱高下した。国民、信じられないですね。二つ目に、そうやって最初の計画が失敗しちゃった結果、二年半に及ぶ工期が浪費してしまったと。そして三番目に、約六十二億円とさっきありましたけれども、六十二億円もの国民の税金を毀損させてしまったと。こういうことで、国民の怒りが爆発しました。これじゃまずいということで、総理が計画の白紙撤回を決断したんですね。遅きに失した感はありますが、決断自体はよかったですと思います。ただ、こうした一連の日本の動きを見ていて、国際社会は日本大丈夫かよと、大きな信用の失墜につながったということだと思っんです。

さて、安倍総理、これどう見ても大失敗ですよ、政府の政策の。あるいは文科省の監督能力が全く欠如している、大失敗です。これだけの失態を起こしながら、この結果責任は全く負わないんでしょうか。このままだと、文科大臣は責任を取って辞任は必要ありませんと言っているんですね。それから、文科省の役人の皆さんも、久保局長は、文科大臣は、更迭ではないと、人事のローテーションだと言い張るわけです。ですから、責任を取っての辞任じゃないんです。それから、実施主体のJSCも誰も責任を取っていません。

総理、これだけの失態を犯しておきながら、全く安倍政権としてこの問題の責任を明らかにしないんでしょうか。きちっとけじめを付けないと、次の計画に行けません。ここでけじめを付けないでなあなあにしておいたら、また同じ失敗を犯しますよ。

総理、地方自治体では、税金をこれだけ毀損したら、まず知事は、

市長は住民監査請求を受けます。それで、監査がきちっとできていないと、今度は住民訴訟に行くんです。実は私、四年前に知事を辞めています。いまだに被告の立場で裁判を闘っているんですよ。それぐらいに税金の毀損というのは、政治家にとって、政府にとって大きなミステークなんです。もし自分の配下の職員が不祥事を起こして税金を毀損させてしまったら、知事始め県庁の職員が全員給与を削減して、ボーナスを削減してそれを埋めていくんです。そこまで地方では税金の毀損ということについてきちっと責任を取っているんです。

政府は、六十二億円、国民の血税を毀損させておきながら何にも誰も責任を取らないんでしょ。見解を伺いたいと思います。

○内閣総理大臣（安倍晋三君） 今般の見直しに伴う費用の発生でございまして、この言わばザハ案の経緯はともあれ、ザハ案に決定された経緯はともあれ、この二年半、安倍政権において検討を重ねてきたわけです。これ以上、費用がかさんできたこのザハ案における新国立競技場の建設は白紙に戻したところでございまして。

そして、なぜそうなったかということについて徹底した原因の究明は大切であろうと思います。これまでの経緯を検証するために文部科学省に第三者委員会を設置をしたところであり、ここでは経緯と併せて責任の所在についても議論をしていただくことになると考えております。

いずれにいたしましても、最終的な責任は行政府の長である私にあるわけですが、この競技場をしっかりと二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックまでに完成をさせ、多くの方々に感動を与える場として国民の皆様にも御評価いただけるようなものを完成していくことによって責任を果たしていきたいと、こう考えているところでございまして。

○松沢成文君 政治家は、自分の責任は自問自答して自分で判断するんです。何で第三者委員会に、私たちの責任どこにあるか検討してください、お願いしますとなるんでしょうか。こんな他力本願なことはないですよ。政治家は、決断することと責任を取ることが政治家の仕事なんです。第三者委員会に検討をお願いして、それで責任があると言ったら、文科大臣は辞めるんでしょうか。後で聞きます。

さあ、総理、今日の私の質問のメインはここなんです。総理は、計画を白紙撤回し、ゼロベースで見直したいと言うんです。そうであれば、人心一新を図るべきです。あえて申し上げますが、私は、総理、

森組織委員会会長、勇退を進言したらどうでしょうか。

今回の建設の見直しで、総理も文科大臣も、森オリパラ組織委員会の会長の説得に一番苦勞したんです。文科大臣はそれに失敗しました。総理は、さすが総理ですね、文科大臣を二日間にわたって説得して、分かったと言わせたんですね。森会長は今回の国立競技場建設問題の直接の権限を持っているわけではありません。しかし、森会長は、政界、財界、スポーツ界において絶大な権力を持っていて、この建設問題にも間接的ではありますが絶大な影響力を持っているんです。だからこそ、お二人は、森会長の意向が大事だということで理解してほしいとお願いに行っているわけですね。

その証拠に、ザハ案での建設を承認した七月七日の有識者会議でも、最初に森会長がザハ案でいくしかないと言って、どおんと発言したんです。そうしたら、ほかの有識者会議のメンバーは誰もそれに対して発言できない。私はびっくりしたんですが、舛添東京都知事と竹田JOC会長、安倍総理の決断を支持しているんですね。それだったら、何でこの有識者会議で、この計画でいったらまずいんじゃないのと、こう言う勇気がなかったのか、このお二人の態度は私は本当に疑問なんです。

事ほどさように、今、日本のスポーツ界で森会長にきちっと進言ができる、いさめる人がいないんですね。私は、現在の日本のスポーツ界の最大の問題は、この森会長に進言したり、いさめる人が誰もいないというところだというふうに思います。

私は森会長に何の恨みもありません。これまで二十年間にわたって日本の体育界あるいはスポーツ界に貢献されて、その功績は誰もが認めるところであります。しかし、総理、森会長は余りにも権力の座にいたことが長過ぎたんです。権力が長期化すると必ずおかしくなるのは、古今東西、政治のさがだと私は思います。

年齢を考えても、今七十八歳ですから、五年後の東京オリパラまで元気で活動できる保証は私はないというふうに思っています。それが悪いと言っているんじゃないんです。あえて言いますが、私は森会長の資質や好き嫌いという感情論で言っているのではないんです。オリンピック・パラリンピックを成功させるための新しい体制をつくる改革論あるいは危機管理論として言っているんです。

総理、やっぱり日本のスポーツ界を刷新しましょう。今回も森会長の存在があって、ほかで誰も森会長にこれはおかしいと言える人がいなかった、これで最後までずるずるずるずる来ちゃったんです。残念

ながら、スポーツ界には誰もいません。恐らく政界にも誰もいないんじゃないかと思ったら、総理が頑張ってそこをやっていたんです。

総理、ここは思い切って、あれだけの決断をしたんですから、森会長に勇退を進言する、そこまでやっていただけだと思うんですが、いかがでしょうか。

○内閣総理大臣（安倍晋三君） まず、私は、オリンピック組織委員会の会長に誰かを任命するとか、あなた辞めなさいと言う立場ではないわけでございます。

そしてまた、森組織委員会の会長は、会長に就任してそんなに長い年月がたっているとは思わないわけでありまして、その職がずっと長いというわけではございません。また、かつ、もう既に自民党の国会議員でもない方でございます。

そういう中で、今回も森会長の了解を得るために時間が掛かったわけではもうこれはないわけでありまして、この競技場自体を白紙撤回する上において、一応、オリンピック組織委員会側にその方向性についてはお話をしていこうということで、会長たる森会長にお話をさせていただいたわけでございますが、了解を取るということではなかったわけでありまして、このように判断をしたので、ただ、I O Cとの関係もございまして、そここのところについて納得をしていただければよいと、こう思っていたところでございます。

○松沢成文君 新しい東京オリパラを成功させるためには、私は新しい発想が必要だと思っています。それこそがレガシーになるんだと思っています。

スポーツを単なる体育の延長と考えるだけでなく、新しいビジネスとして考えられる人、あるいはオリンピックを巨大な箱物を造って国威発揚に使おうとする、そういう発想ではなくて、むしろ民間の発想で成長戦略につなげる、そういう新しい発想を持てる人、私はこれが必要だというふうに思っています。

総理は十数年前、二〇〇三年、自民党の幹事長だったとき、当時の中曽根元総理に御勇退を迫りました。中曽根元総理も、自民党の定年制をしいたと、党改革の大義のためにお受けになりました。

総理も森会長と親しいのは重々私も知っています。もちろん、情があると思います。しかし、情を押し殺しても、オリンピック成功という大義のために、人心一新、その改革ができるかどうか、私はここも大きな要素だというふうに思っております。是非とも、上の方にしつ

かり説得するのは安倍総理、得意だと思しますので、森総理の勇退を進言していただきたいというふうに思います。

最後に文科大臣に聞きますけれども、文科大臣は、自分の責任があるかどうか分からないが、あるんだろうけれども、第三者委員会をつくと。第三者委員会を文科省の中につくること自体、私は間違っていると思いますけれどもね。これは外につくらないと、大臣官房に置いたって、大臣のことを気にするに決まっています。

大臣は、じゃ、この中間報告、九月中旬に出ます。そこで、監督責任があるという方針が出たら、そこで、文科大臣に委ねたわけですから、それを受けて適切に判断すると言ったわけですから、第三者機関にも、そういうことになった、そこで引責辞任をするんですね。ここをお聞きしたい。

○委員長（岸宏一君） 時間が過ぎておりますので、簡潔な答弁を。

○国務大臣（下村博文君） はい。

新国立競技場の整備計画に係るこれまでの経緯について検証、また併せてそれぞれの責任の所在、これについて第三者委員会を設置して、経緯と責任の所在、議論をしていただくことにいたしました。

これは文科省に設置しますが、それぞれの、第三者委員会が独立して、そして我々のそういうふうな、何かねじ曲がったというふうなことがないような厳正な調査をしていただきたいと思えます。その上で、その結論について私は謙虚に対応してまいりたいと思えます。

○松沢成文君 どうも、時間です、ありがとうございました。

○委員長（岸宏一君） 以上で松沢成文君の質疑は終了いたしました。

（拍手）